

Title	チェーホフの姿勢(1)
Author(s)	武藤, 洋二
Citation	大阪外国語大学学報. 17 p.89-p.98
Issue Date	1967-03-25
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80278">https://hdl.handle.net/11094/80278</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## チエーホフの姿勢（1）

武 藤 洋 二

### 序

広津和郎は、『志賀直哉論』（大正8年）のなかで次のようにかいた。

「武者小路実篤氏はひたすらに正しきものに向って突進する点に 彼の特色を持っているが、志賀氏の正しきものを求むる心は、前方へ向ってひたすらに突進するよりも、寧ろ後方を振向いて虚偽をこの人生から駆逐するところにより多く現れている。前者が理想的傾向を帯び、後者が現実的傾向を帯びる所以である。」<sup>(1)</sup>

細民的インテリゲンチヤであった若い広津にとって、ブルジョア・インテリゲンチヤ 武者小路の「理想的傾向」は、うけいれにくかった。これは、生活の重荷を感じながら生きていかなければならない小市民にとっては、実生活を一步一步たしかめずに、「前方へ向ってひたすらに突進する」ことだと思われた。広津は、この「理想的傾向」の底に、『人生とはこんなものだ』と云ったようにたかをくくるちよこざいの傲慢<sup>(2)</sup>を感じた。

このような広津和郎の心にびったりする前向きの姿勢は、「前方へ向ってひたすらに突進するよりも、寧ろ後方を振向いて、虚偽をこの人生から駆逐するところ」に求められた。いいかえれば、彼にとっては、正しいものを求める姿勢は、正しくないものをかぎだす態度としてあらわれたときに、心に密着してうけとめられ、そうでないときは、不自然で、非現実的に感じられた。

このような感情は、前方への突進をゆるさない天皇制下の日本の社会と、小市民的なインテリゲンチヤの立場からうみだされる。その土台には、人生を割りきらない、という態度がある。これは、人生にたかをくくらない、ひたむきな生き方である。

広津和郎は、人生を次のようにみる。

「私は人生を暗いと考えているわけではなく、『明るさ』を求めているのであるが、併しそれだからと云って、『明るい』と直ぐ思い直せるわけでもなく、又勿論『暗い』と決定するなどは尙の事イヤなのである。」<sup>(3)</sup>

このように考える広津は、「チエーホフの強み」を次の点にみる。

「チェエホフの真の偉さは範疇を作らなかったと云う点に在る。彼は人生を 円の中にも角の中にも入れ込もうとはしなかった。」<sup>(4)</sup>

人生に結論を下さずに対決することが、広津和郎の根本的な態度だった。彼は、チエーホフのなかにそれを見つけた。彼がチエーホフに共感したのは、まさにこの発見のためだった。したがって、これとは全く対照的に「教を以て人生におっかぶせて行く作者」<sup>(5)</sup>トルストイに彼はなじめなかった。

素手のままで人生と対決し、現実に着する生き方は、暗い時代を生きぬき、生きのこるための、強い地道な生活態度になりうる。太平洋戦争の前夜、広津和郎は、それを「散文精神」となづけて強調した。日本の作家のなかでおそらくもっともチエーホフに傾倒した広津が、暗い時代を生きぬく精神として強調したものこそ、彼がチエーホフのなかにみた精神であり、生き方ではなかっただろうか。

それは、「どんな事があってもめげずに、忍耐強く、執念深く、みだりに悲観もせず、楽観もせず、生き通して行く精神」<sup>(6)</sup>であり、「ちっと我慢して冷静に、見なければならぬものは決して見のがさずに、そして見なければならぬものに慣えたり、戦慄したり、眼を蔽うたりしないで、何処までもそれを見つめながら、堪え堪えて生きて行こうという精神」<sup>(7)</sup>である。それは、決して、「直ぐ思い上の精神」や、「直ぐ悲観したり滅入ったりする精神」や、「無暗に音を上げる精神」ではない。

戦後、この「散文精神」を、伊藤整が、現実からはなれ、「生活の真実を見て取る探究を道とする精神」だときめつけ、非社会的な、狭い個人的な求道精神だと解釈したことに、広津は抗議して、次のようにかいた。

「日本の大陸政策を合理化しようという御用学者があり、日本のロマンティズムの黎明を謳歌する文学者もあるが、そんな莫迦げた事を真に受けて有頂点になってはいけぬ、と同時に、この不合理のフアツシヨの攻勢に傷心してみだりに悲鳴を挙げてはいけぬ。今後どんな驚くべき事が来るかも知れないが、どんな暗黒の時代が来てもめげずに忍耐して執念深く生き存らえて、歴史の動向を見定めなければならない——それが散文精神だと云ったのである。

それは現実を逃げ、社会の激動と無縁に、自己の狭い領域で道を探究しようというストイシズムではないのである。そうではなくて何処までも現実と対決し、歴史に責任を持って、傷心せず、執念深くあくまで生きて行こうという精神なのである。」<sup>(8)</sup>

これは、まさに、弱い個人が自分に敵対している社会と対決するためにこそ必要な精神であり、自己の内にとじこもるための心得ではない。これは、「歴史を無視して観念上で天高く飛翔する天

才主義者」<sup>(9)</sup>にも、「歴史の動きの表面で泡立つ現象に一々喜んだり悲観したりする現象主義者」<sup>(10)</sup>にもならないで、執念深く現実と向いあう生き方なのだ。これは、人生とは何かという問の解答のためではなく、いかに生きぬくかというさしせまった問題にとりくむための精神だ。

広津和郎が強調するこの精神こそ、革命の前夜に生きぬいたチエーホフをつらぬいていたものだ。

この精神は、しばしば不当に誤解される。これは、弱さだ、とみなされがちだ。この誤解は、人生に対する皮相な、せつかちな見方と、チエーホフや広津和郎にみられるゆうつうの雰囲気からくる。

彼らのゆうつうは、現実密着から必然的にうまれる。現実が暗いかぎり、このゆうつうからのがれるためには、「前方へ突進して」生活からはなれてしまわなければならない。

田村栄氏はいている。

「人生の諸矛盾にたいして容易に結論をつけようとせず、矛盾のままに味わおうとし、味わうことによって理解を深めようとした広津氏が、深いゆうつうにとらわれねばならなかったのは当然のことでした。」<sup>(11)</sup>

このゆうつうは、暗い時代に、人生とはこんなものだ割り切るせつかちな悲観主義におちいらないブレーキとなった、息のながい現実密着の生き方に附随してうまれる。だから、これは、ペシミズムとは別のものだ。これこそは、すさまじい現実との執拗な闘いのなかで人間が身にあびた返り血であって、その人間自身が弱りはてて吐いた血ではない。現実の返り血であるこのゆうつうさ、現実との沈着な対決と闘いの傷あとのなかに、着実な、ひたむきな、かけねのない革命性の反映がみられる。もちろん、これは、英雄的なものではない。それは、じやまされ、おさえつけられ、しようことなしに、せっぱつまった形であらわされた前向きの姿勢だ。それは、「堪え堪えて」最後には、現実の暗黒よりも生きながらえて、そのときはじめて、ほんとうに建設的な形をとることのできるレジスタンス的な態度だ。それは、革命直前の困難な時期に革命をささえる精神である。

ぼくらにとって次の事実が大切だ。

「前方へ向ってひたすらに突進した」武者小路実篤が、ファツシズムをたたえ、それとは逆に日常生活にしがみついて、「暗さを見つめつづけることがそのまま理想への努力そのものだと考えていた」<sup>(12)</sup>広津和郎は、戦争中を生きぬき、松川裁判に対する批判活動のなかで、「散文精神」を政治参加に結実させたのだ。

最後には、ゆうつうさの雰囲気からぬけだし、政治参加へと花ひらいたこの「散文精神」との関連のなかで、チエーホフについて考えてみよう。

チエーホフをペシミストだと考える人も、最低限度、次のものがチエーホフの生活と文学の根底にあるのに同意するだろう。それは広津和郎が二葉亭四迷の生活のなかにみつけた次のことだ。

「何事が理想かと云えば個々の事は云えても、大きな意味での一貫した答は出来ない。そして又何事が目的かと云えば、これ亦個々の事は云えても、大きな意味での一貫した答は出来ない。それは無理想無目的に近い。それなのに現在に満足が出来ず、生きて動きたいのである。」<sup>(13)</sup>

チエーホフの作家活動は、「無理想無目的に近い」状態から出発し、そのなかで苦しみながら、たしかな生きる基盤を求めようとする姿勢につらぬかれている。これが彼自身の人生経験のなかで強められ、彼の創作の発展過程を形成する。

彼の作品は、現状に対する不満におおわれているが、その不満の根底には、ペシミズムではなくて、「生きて動きたい」というあたりまえの生活意欲があった。チエーホフにとって、これが最終的な支点であった。彼の愛する女主人公たちは、みな健康な生活意欲にあふれている。しかしこの生きる意欲をつらぬくためには、現存秩序との闘いが必要だった。生きる意欲は、明確な政治的態度を必要とした。

シベリヤの旅以後、チエーホフの関心は社会制度の根本に集中され、「なにをなすべきか」という問が政治参加の問題として、具体的に提出されるようになった。

『6号室』(1892年)、『無名氏の話』(1893年)、『中二階のある家』(1896年)、『わたしの生活』(1896年)は、この問いかけが、なまなましい苦悩をとおして具体化され、はっきりした姿勢や態度となって、生活の基盤そのものの変革へとみちびかれていく過程である。

この過程をたどることによって、チエーホフの創作にながれる一貫した姿勢と、人間チエーホフが社会的矛盾のいやまさる状態のなかで、いかに生きぬいたかということを知ることができる。

これは、また、チエーホフを現代性のはかりにかけを意味する。なぜなら、ぼくら自身が、時代の性格のちがいをこえて、チエーホフの苦闘を身近かなものとして感じるからである。

スターリン批判によって提起された諸問題は、現代人が自己の活動を日常性におき、個人としての責任を自覚しながら生きることがいかに大切であるかを、あらためて、新しい次元のなかで示している。個人としての苦闘なしに社会運動につらなることはできない。そのような「闘士」たちは、歴史の表面の泡立ちにとまどう「現象主義者」になるだろう。

チエーホフが、決して「現象主義者」にならなかったことを考えてみることは、一見彼のじみな苦闘が軽視されそうな激動の現代に生きていくぼくらにとって、有益である。いうまでもなく、現代の階級闘争は、しばしば、チエーホフにかえりみるひまをあたえない。この意味において、

チエーホフを現代性のはかりにかけて、いじめぬくことも、又、ぼくらには有益である。

「扱て、わが最も敬愛するチエホフの霊よ。私も亦君のその悲しげな笑い、君のその聡明な、澄み切った、そして善良な心臓に、もうつくづく飽きが来たのだ。君の存在を知ったという事が私の心を高めてくれた事は確かだが、それと共に、私がどうともこうとも出来ないところに落ち込むのを君は確かに手伝ってくれた。——そこで、君は死んだからもういいが、生きている私は、どうしてもこの行きづまりの穴の中から這い上って、そして後れ走せながら、君の時代とは違った眼、違った意志で、改めて今の日本を見直し、その進むべき方向を見つけ、それへ向って進んで行かなければならない。」<sup>(14)</sup>

「チエーホフの幽霊」をおいはらうために、広津和郎はこのような別れのことばをかいた。これが、正当なものかどうかは、今の日本におけるぼくら自身の生きる姿勢、政治的態度によって判断される。この判断なしには現代におけるチエーホフ論は有益ではない。

## 1

『6号室』は、ロシアのインテリゲンチヤの尻をたたいた作品である。これは、ロシアの現実の縮図などと割り切れた作品ではない。シベリヤの旅から帰ってきたチエーホフは、たとえ話でロシアを語れるとは思わない。チエーホフがかきたかったのは、社会的矛盾を前にしたインテリゲンチヤに対するはがゆきである。彼はインテリゲンチヤへの告発状をかいたのだ。

「われわれは、人びとを寒さのなかで何万ヴェルスターも手枷足枷で追いまわし、梅毒を伝染させ、墮落させ、罪人をふやしましたが、全部これを刑務所の赤鼻の看守に負わせてしまいました。今では教育ある全ヨーロッパは、看守ではなくて、われわれすべてに罪があるのを知っています。」(1890年3月9日スヴオーリンへの手紙)

チエーホフは、『6号室』を発表する前、このようにかいた。『6号室』は、この「われわれすべての罪」を生活態度のなかに見つけ、あばきだした作品だ。

主人公は、ラーギンという医者である。彼の病院は、アブラムシとナンキンムシの巢で、患者はねむれず、病院中にどうかこうにかメスが2本しかなく、体温計は1つもなく、その上、看護婦や職員たちは、患者を食いものにしている。

ラーギンは、病院の状態を見て、次のような結論を下す。

「この施設はでたらめで、住民の健康にとってきわめて有害である。」<sup>(15)</sup>

ラーギンは、一応、心を痛めるが、結局は、どうにもならず、こう考える。

「わたしは有害なことに奉仕して、自分がベテンにかけている人々から給料をもらっている。

わたしは誠実でない。しかし、わたし自身は、とるにたりないものだ。わたしは社会的必要悪の一部にすぎない。郡の役人たちは皆有害で、だてに給料をとっている……。つまり、自分の不誠実さは、わたしのせいではなくて時代のせいなのだ……。わたしだって200年もあとに生れていたら、別な人間になっているだろう。」<sup>(16)</sup>

病院が有害であるという結論と、自分はその有害な仕事に奉仕していても責任はないという考えとの間を、どのように埋めるかという問題をえがけばラーギンの生活の基本線がうかびあがる。チエーホフは、そのような生活者としてラーギンをえがいている。これは、一般的には、インテリゲンチヤにおける社会的矛盾と自分の責任との関係の問題である。

ラーギンは、現実が手におえないものだという事を大前提にしてものを考える。だから、現実には、彼にとって、問題でなくなる。問題なのは、現実を前にした自分の良心のあつかい方である。こまったことに、彼は「知性と誠実さを非常に愛した」ので、現実の醜悪さに鈍感ではない。そこで、彼には、自分の良心をなだめて、安心させる必要がでてくる。

ラーギンの良心懐柔作用の要点は、グローモフという患者との対話のなかであきらかにされる。

グローモフが、監獄まがいの病院ぐらしにたえかねて、「どうしたらいいのだ」というと、ラーギンは、「なんとかなぐさめて、おちつかせてやりたくなった」ので、「一番いいのは、もちろん、ここからにげることですよ」といってやる。しかし、それは、できない。そこで彼は、「もう一つの方法」を教えてやる。「自分がここにいるのは、やむをえないと考えて安心することです。」<sup>(17)</sup>

しかし、社会的不合理の集中的なあらわれのなかで、自分を安心させるためには、こんな大ざっぱなことではだめだ。ラーギンは、ここで自分の手のうちをみせる。彼には2つの方法がある。

「人生を理解しようとする自由な深い思索と、世の中のバカげたいとなみに対する完全な軽べつ——これこそは人間の知ったこの上もない善です。」<sup>(18)</sup>

現実の軽べつ——これは、現実の苦しみを軽視することである。あるいは、無視することである。

「あたたかい居ごちのいい書齋とこの病室とのあいだには、なんのちがいもありません。人間の平穩も満足も、自分のそとにあるのではなくて、自分自身のうちにあるのです。」<sup>(19)</sup>

このような「現実の軽べつ」は、現存するもののむなしさを説くだけでは、不完全である。ラーギンは、「生活はいまいましいわなである」<sup>(20)</sup>と考えている。現実を無視するためには、このわなをわすれてしまわなければならない。

「分析したり総合したりする傾きのある人たちが互いに集って、誘りたかい自由な思想を交換して時をすごすとき、生活のわなに気づかないのです。」<sup>(21)</sup>

ラーギンののべた2つの方法——「人生を理解しようとする自由な深い思索」と「世の中のバカげたいとなみに対する完全な軽べつ」——は、一つになって働く。つまり、「思索」は、「現実軽べつ」による現実逃避を現実超越のように思わせて、ラーギンを安心させる。

この「自由な誘りたかい思想」の働きは、『発作』(1888年)の笑話を思いださせる。——2人のドロボウが森のなかで乞食を殺した。着物の分配にとりかかっているとき、2人は豚のアブラを袋のなかに見つけた。「こいつはありがたい。ここで食おう。」と一人がいった。すると相ぼうが、「とんでもない。今日が水曜日なのをわすれたのか。」と云った。2人はアブラに手をつけなかった。彼らは人を殺しておきながら、自分達は精進をまもったと信じて森を出ていった。

ラーギンの良心懐柔策は、自分がこの精進をまもったような気になることであった。ラーギンは自分の無為によって現実の醜悪さを助けながら、自分は現実を軽べつしていると思い、哲学的な言訳によって精進をまもっているような気分になって、良心を安心させる。こうしてラーギン自身は、結局、現実の醜悪さの一部分になってしまう。

生活のわなにかかっているグローモフには、ラーギンの理くつは、「ロシヤのなまけ者に うつつつけの哲学」<sup>(22)</sup>だと思われる。「あたたかい居ごちのいい書斎」にいるラーギンが現実軽べつを説くのに反して、監獄まがいの精神病院の6号室で「もうずいぶん長いあいだ人間らしいくらしをしていない」グローモフは、現実憎悪をさげふ。

「生活を重荷に感じたり、憎んだりすることはできる。しかし生活を軽べつすることはできない。」<sup>(23)</sup>

なぜなら、「苦しみを軽べつし、いつも満足し、何物にも驚かないでいるためには」「生きるのをやめる」必要があるからだ。なぜなら、生活はそんなものではないからだ。

「ぼくが知っているのは、神様が、あたたかい血と神経でぼくをおつくりになったことだけです。そうです！有機体は、生活能力があればあらゆる刺激に反応しなければなりません。だからぼくは反応します。ぼくは、苦痛に対しては悲鳴と涙でこたえ、卑劣さにはふんがいで、醜悪さには嫌悪でこたえます。ぼくの考えでは、これこそが生活とよばれるものなのです」<sup>(24)</sup>

ラーギンの説くのは生活ではない、ときめつけてから、グローモフは、苦しみを軽べつせよといえる資格があるのかとラーギンにせまる。

ラーギンが苦しみの軽べつを説くことができるのは、彼が、苦しみ、つまり、生活をさけてき



たからだ。

「あなたは生活を見なかった。生活を全く知っておられない。理論の上でだけ現実を御存知なのだ。」<sup>(25)</sup>

ラーギンにむけられたグローモフのこのことばは、シベリヤ旅行によってツアーリズムの恥部を見てきたチエーホフがロシアのインテリゲンチヤに向ってのべたものだ。

「あなたは現実を全く御存知ないし、一度も苦しめたこともない。まるでひるのように、ただ他人の苦しみによって養われてきたのです。」<sup>(26)</sup>

ラーギンが苦しみの軽べつを説くことができ、現実を超越したようにふるまうことができたのは、彼のかわりに他人が苦しんできたからだ。このことばは、ツアーリズムにあえぐロシアの人民の姿をふんまえている。

グローモフとの話し合いがあだになって、ラーギンは気狂として6号室にとじこめられることになる。「今まで他人の血を吸ってきたから、こんどは吸われる番なのだ。」<sup>(27)</sup>

ラーギンは鉄格子から外を見る。凍るような月と監獄がみえる。

《あれが現実だ！》

ラーギンは、ぞっとする。今こそ、彼は、現実のおそろしさを消すために「哲学」する時だ。グローモフは、身ぶるいしているラーギンにいう——「哲学でもおやりなさい。」

生の現実を自分自身で実感したとき、ラーギンの「哲学」はきえてしまう。「ここから出ていく」とラーギンはいう。これ以外のことはなにも必要ではない。しかし、彼のはかない反抗は、看守のニキータのゲンコツでおしつぶされてしまう。

なぐられてぼんやりしているラーギンの頭のなかに突然、「おそろしい、たえがたい考えがはっきりとひらめいた」。彼は6号室の住人たちの運命を身をもって知ったのである。

「これと全く同じ苦痛を、いま月の光をあびて黒い影のように見えているこれらの人たちは、何年ものあいだ、くる日もくる日も経験しなければならなかったのだ。」<sup>(28)</sup>

自分が目をつぶりつづけ、自分の良心のふたをして、ひたすらしらん顔をしてきた人々の状態を目の前に見、自分の体で知った今のラーギンには、完全な転身が破滅しかない。

「わたしが、くたばってしまうには、生活があらあらしくわたしにふれさえすればよかったのだ。」<sup>(29)</sup>

よく日、ラーギンは卒中で死ぬ。

自分の「哲学」から武装解除されたままのすがたで、現実と向きあったとき、自からによる疎

外によって保護されていたラーギンの真の自己は、ひとたまりもなく敗北した。これは、醜惡な現実を前にして感じる責任と良心のいたみから現実変革の行動が生みだされないで、逆に、自己の内へとじこもることによって責任と良心の追求を、精神の「浄化」作用の助けで、ごまかしてきた人間の破滅である。

『6号室』では6号室をつくりだした者よりも、それを温存させる者に、焦点があてられている。ツアーリズムの手先「赤鼻の看守」ではなくて、「われわれすべて」に批判のほこ先がむけられている。なぜなら、これがまず最初になされるべきことだったからであり、それ以外のことは歴史的に不可能だったからである。

『6号室』の批判の対象は、社会的不合理を温存させるラーギンの生活であるが、その批判は、まず、生身の人間がのびのびと生きるのをさまたげるすべてのものにむけられる。ラーギンの生活は、生命力の発展をじゃまするので批判される。それは、「あたたかい血でつくられた人間」に敵対するので批判される。

チエーホフにとって政治は、いつも、生命力謳歌の行為と結びついている。だから、現存制度をたおすために闘っているテロリストも、それがテロリスト個人の生活と生命を犠牲にしておこなわれる点ですであわれに見え、反対に、わたしはなぜ、もっと若くて美しかったときに極道しておかなかったのだろうと、くやんでいる人妻は、感動的である。

チエーホフのこのような見方は、彼の創作をつらぬいている。彼は、たとえば、若くて健康で美しい女が、因習のからをやぶり、自分をのびのびと生かそうとする態度のなかに、新しい生活へのエネルギーをみる。彼は、このエネルギーを信じながら、たとえば、『犬をつれた奥さん』をかいた。

ラーギンの「哲学」が、生命謳歌の革命性と敵対したことはあきらかだ。「ぼくは反応する」というグローモフのことばは、「反応する」ことを許さない制度のもとでは、そして、「反応する」ことをひたすらさせている人間の多い社会では、反抗につながる。

この反抗は、全生活的である。チエーホフにあっては、そうでないものは、たいてい破産させられてしまう。チエーホフは、狭い政治的行為を警戒の目でみていた。

全生活的ということは、丸山真男氏の表現をかりれば、結局、反政治主義であり、同時に全政治主義である、いいかえれば、これは、政治の理念を、日常生活を土台とした全生活的な歩みと対立させることに反対するのである。

チエーホフが同感をもって登場させた、政治参加するインテリたちは、ある政治の理念によっ

て世の中をわりきり、合点したうえで行動するのではない。彼らは、いわば、地図のない旅人である。彼らは、たえず、さまよいなやむ。しかし、彼らの一歩は、彼ら自身の責任によってふみだされたものであり、それは、たとえ貧弱であろうと、彼らの全生活的な苦闘のたまものであった。

これは、もちろん、チエーホフが明確な政治路線をうちたてることに反対したことを意味しない。彼を満足させる政治思想がなかったのである。チエーホフは、マルクスを知らないままに誤解していた。彼は、自分の作品がマルクス主義の雑誌にわたったとき、ひどく後悔した。彼はマルクス主義を知らなかった。

80年代から90年代にかけて、ロシアでは、ナロードニキのテロリズムと「小さな事業」がはばをきかせた。徹底的な反体制の精神をもっていたチエーホフは、「小さな事業」とよばれる改良主義に反対し、作品のなかでその偽善性をあばきつづけた。それと同時に、チエーホフの全生活主義は、おいつめられたナロードニキのテロリズムを否定した。『6号室』において、レーギンの生活に対抗した生身の人間の尊重の主張は、全生活的な政治観の土台となって、チエーホフのヒューマニズムの本質をかたちづくるのである。(つづく)

1966年9月

#### 注

- (1) 広津和郎 『わが文学論』(著作集第2巻) 乾元社 昭和28年 134ページ
- (2) 同 上 129ページ
- (3) 広津和郎 『神経病時代・若き日』岩波文庫 223ページ
- (4) 広津和郎 『わが文学論』62ページ
- (5) 同 上 66ページ
- (6)(7) 同 上 231ページ
- (8) 同 上 390ページ
- (9)(10) 同 上 391ページ
- (11)(12) 田村 栄 『広津和郎氏の文学的姿勢について』「アカハタ」1965年9月19日
- (13) 広津和郎 『わが文学論』206ページ
- (14) 広津和郎 『散文精神について』新生社 昭和22年 157ページ
- (15) А. П. Чехов Собрание сочинений Гослитиздат Том 7 стр. 133
- (16) там же стр. 142-143
- (17) там же стр. 146
- (18) там же стр. 147
- (19) там же стр. 150
- (20) там же стр. 139
- (21) там же стр. 139-140
- (22) там же стр. 153
- (23) там же стр. 152
- (24) там же стр. 151
- (25) там же стр. 153
- (26) там же стр. 155
- (27) там же стр. 172
- (28) там же стр. 175
- (29) там же стр. 173